

# カメルーン、グラスフィールドにおける 首長国群の文化資源

下休場千秋

## 研究の背景

中央アフリカ、カメルーン共和国の北西州、及び西州に広がる標高約1000mの草原地域をグラスフィールド(Grassfields)と呼び、この地域の民族集団は、バミレケ(Bamileke)、バムーン(Bamoun)、ティカール(Tikar)に大別される。これらの民族集団は、いずれも北方のアダマワ(Adamaoua)山地から移住してきたといわれ、現在も約200の首長国群(Cheifdoms)を形成している(図1)。これらの首長国群はそれぞれの王宮を中心として、500年以上に渡る歴史を有しているが、経済、社会のグローバル化の影響により、それらの伝統文化は失われつつある。

本稿では、現地調査で得ることができた情報をもとにして、これらの首長国群の王宮、儀礼祭祀、民族芸術、博物館など有形・無形の文化資源の現状と課題について報告し、今後の保全と活用の方策について考察を行う。

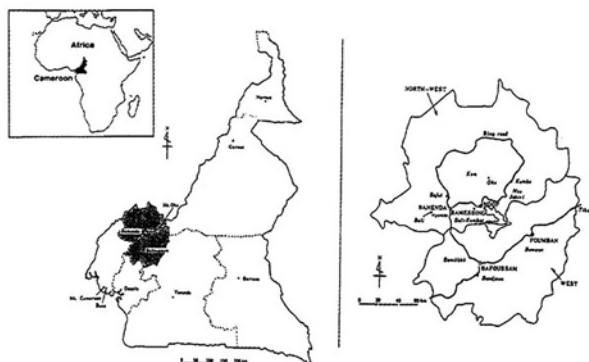


図1. 調査地の位置図

## 現地調査の目的と概要

現地調査の目的は、カメルーン、グラスフィールドに現存する首長国群の王宮に設置された博物館と、そこに展示されている収集品を中心とする文化資源の保全と活用に関する現状と課題を明らかにすることにあつた。

現地調査の期間は、2014年2月3日から19日までの17日間という比較的短期間で、今後、展開する予定の本格的な調査研究に対する予備調査という位置づけで行ったものである。

今回の現地調査は、筆者にとって約10年ぶりとなるものであつた。前回の現地調査以来、最近10年間に、グラスフィールドに現存する首長国群の文化資源がどのように変容したのかを把握することも重要な調査目的の一つであつた。

調査地は、カメルーン共和国の北西州にあるバフツ(Bafut)、マンコン(Mankon)、バブング(Babungo)、バメッシング(Bamessing)、ンクウェン(Nkwen)、メンダクウェ(Menda-Nkwe)の各首長国と、西州にあるバンジュン(Bandjoun)、バハム(Baham)、フンバン(Foumban)の合計、九つの首長国である(図1)。これらの首長国の中で、マンコン、バンジュン、フンバンを除いた各首長国の六人の首長に面会した。さらに、バフツ、マンコン、バンジュン、バハム、フンバンの各王宮内に開設されている五つの博物館の学芸員から英語による聞き取り調査を実施した。

## 調査結果

首長国名	博物館	学芸員	特記事項	民族集団	所在州
バフツ	○	△	ユネスコ世界遺産候補	ティカール	北西州
ンクウェン	×	×	州都・バメンダ	ティカール	北西州
メンダンクウェ	×	×	州都・バメンダ近郊	ティカール	北西州
バメッシング	×	×	焼き物産地	ティカール	北西州
フンバン	○	○	新博物館計画、工芸村	バムーン	西州
マンコン	○	○	地域観光開発	ティカール	北西州
バンジュン	○	○	伝統建築	バミレケ	西州
バハム	○	○	新博物館計画	バミレケ	西州
バブンゴ	○	○	木工品産地	ティカール	北西州

表1 調査した首長国群の概要

表1は調査した首長国群の概要をまとめたものである。カメルーン、グラスフィールドにある首長国群の内、今回の調査において訪問した九つの首長国の中で、六つの首長国には博物館が整備され学芸員がおり、そのうちの二つの首長国、フンバンとバハムは現在の博物館を移転し、新しい博物館を建設する計画を持っている。残りの三つの首長国、ンクウェン、メンダンクウェ、バメッシングにはまだ博物館が整備されていない。

各首長国の特記事項として、バフツ王宮はユネスコ世界遺産の暫定リストに登録されている。ンクウェン王宮は州都・バメンダの市街地内に、メンダンクウェの王宮はその近郊に位置する。さらに、バメッシングの陶芸、フンバンの金属工芸、バブンゴの木工といった特色のある民族芸術品の産地がある。ま



写真1. バフツ王宮に開設された博物館 (2014年2月、著者撮影、以下同様)

た、バンジュン王宮の伝統建築が有名である。これらの首長国群は、北西州または西州に属し、三つの民族集団のいずれかを中心に構成されている。以下において、各首長国の文化資源に関する調査結果を述べる。

### ① バフツ

バフツの王宮では、2006年にドイツ政府の援助により既存の建物を改装した博物館が開設された(写真1)。展示内容は11代続く歴代首長ごとにまとめられ、各首長が使用していた王権を象徴する象牙の楽器、ヒョウの毛皮、玉座、王の衣装などの民族芸術品が展示されている(写真2)。しかし、王宮内に博物館が設置されているにもかかわらず、学芸員の育成が十分なされていない実情がある。

また、バフツ王宮は、2006年にカメルーン政府により、ユネスコ世界遺産の暫定リストに加えられた(写真3)。カメルーン観光省が作成した観光ポスターの中にも、バフツ王宮の写真が使用されており、今後、正式に世界文化遺産として推薦されることが期待されている。

さらに、2010年にアメリカに拠点を置くNPO、ワールド・モニュメント財団の援助により、数多くの王宮内の建物の内、6棟の傷んだタン屋根を焼成タイルで葺き替える修復事業が行われた(写真4)<sup>(1)</sup>。バフツの首長からの聞き取りによると、いまだに、王宮内の多くの建物の屋根が雨漏りをするほど傷んでお



写真2. バフツ博物館の展示品



写真3. ユネスコ世界遺産の暫定リストに加えられたバフツ王宮



写真4. 焼成タイルで葺き替えられた建物

り、補修のための資金が不足しているとのことであった。

北西州の首長達は、各首長国が抱えている問題を話し合うための連合組織を作っており、バフツの首長は、その北西州首長連合の初代会長を務めた人物である<sup>(2)</sup>。バフツはグラスフィールドに存在する200ほどの首長国の中でも最大規模の首長国の一つであるが、王宮の建物群の補修、維持管理が十分に行われていない現実がある。

バフツ王宮のシンボルとなる歴代王の祖霊を祀る建物（アチュム、*Achum*）の内部は非公開であるが、王宮の数多くの儀

礼祭祀は、この建物を中心として執り行われる(写真5)。

## ② インクウェン

数世代前のバフツの首長とは兄弟関係であったと言われるインクウェン首長の王宮については、まだ博物館が設置されていない(写真6)。しかし、王宮の建物には王権を象徴する壁画が至るところに描かれ、王宮全体がまるで博物館のような雰囲気を持っている。先代の首長の逝去に伴い、2013年11月に即位した元高校教師の現在のインクウェン首長は、大変、



写真5. バフツ王宮の祖霊殿と現首長(Fon Abumbi II)



写真6. インクウェン王宮と王の私設秘書





写真7. ンクウェン首長(Fon Agehfor II)

教育に熱心な人物で、博物館の設置にも前向きな人物である(写真7)。

北西州の州都・バメンダ(Bamenda)の都心部に最も近いところに位置しているンクウェン王宮内には、現在、北西州首長連合の本部が建設されようとしている。将来、北西州の首長国群が抱える課題に対してこの組織が果たす役割には大きな期待がもたれている。

### ③ メンダクウェ

州都バメンダから5kmほど南部の山麓部に位置するメンダ



写真8. メンダクウェ王宮

クウェの王宮には、多くの民族芸術品が収蔵されているが、いまだに博物館は設置されていない(写真8)。儀礼祭祀に関する豊かな無形文化遺産が存在し、さらには地元の郷土史研究者による文献も存在する<sup>(3)</sup>。病気がちの現首長であるが、博物館の整備に対して強い意欲を持っていることを今回、確認することができた。

### ④ バメッシング

昔から土器の生産で有名なバメッシングの村内には、スイス人のミッション組織が援助をして創設した焼き物工房があり、地域住民が生産活動に従事している(写真9)<sup>(4)</sup>。観光客が訪問すると工房内を見学し、生産された土産物を購入することができる。バメッシングの王宮内には、まだ博物館が開設されていないが、バメッシングの首長は多くの収蔵品を所有している(写真10)。博物館以外にも、地域に存在する多様な文化資源を有効に活用することで、地域の活性化に結びつけることができると考える。バメッシングの焼き物工房は、地場産業として地域住民に対して就労の機会を与えており、今後、コミュニティ・ベースド・ツーリズム(地域主導型観光)<sup>(5)</sup>の導入を図ることにより、観光資源としての価値を発揮することができると思う。

### ⑤ フンバン

カメルーン共和国のフランス語圏に属する西州にあるフンバンでは、王宮のメインの建物が博物館として利用されており、多くの観光客が訪れている(写真11)。さらに、新しい博物館の建設計画が立てられており、すでにその完成模型が展示されている。フンバンの学芸員は博物館の来館者に対して、バムーン語をはじめ、フランス語と英語の双方でも解説することができ、博物館内にはミュージアム・ショップもある。

フンバンは、グラスフィールドの首長国群の中でも最大規模の首長国である。王宮の周辺には、木工や金工の職人村があり、仮面や装飾品の一大産地が形成されており、王宮の周辺では多くの民族芸術品が展示販売されている。



写真9. 焼き物工房で働く職人



写真10. バメッシングの首長 (Fon Mntong Richard III)

⑥ マンコン

北西州のマンコン、バブンゴと西州のバンジュン、バハムの四つの首長国には、イタリアのNGOであるCOE (Centro Orientamento Educativo) 協会の援助により、2005年前後に

博物館の設置、学芸員の育成、図録の作成が行われた<sup>(6)</sup>。今回の調査において、これらの四つの王宮内には、いずれも立派な博物館が開設されており、専門的な研修を受けた学芸員がいることが分かった。さらに、イタリアで印刷された博物



写真11. フンバン王宮の博物館



写真12. マンコン博物館の学芸員 (Mr. Nshay Vincent Aberafo)





写真13. バンジュン博物館

館の図録も販売されている。

マンコンでは、イタリアのNGOによる援助の結果、優秀な学芸員が育っている(写真12)。この王宮には年間約2000人の外国人観光客が訪れる。



写真14. 再建されたバンジュン王宮の建物

#### ⑦ バンジュン

バンジュン王宮の博物館は、以前の展示内容が刷新され、学芸員がいる(写真13)。しかし内部の写真撮影が禁止されていた。王宮を象徴する建物が数年前に火災により焼失したが、村人のボランティアにより、見事に再建された(写真14)。バンジュンの王宮建築は大変見応えがあり、ここには年間約3000人の観光客が訪れる。

バンジュンでも、イタリアのNGOによる博物館設置、学芸員育成、図録作成といった援助事業の成果が現われていることが明らかであった。



写真15. バハム博物館



写真16. バハム博物館の展示風景



写真17. バハム博物館の学芸員(Mr. Fomkong Nkam Aibert)



写真18. バブングの木工職人

### ⑧ バハム

バハムの王宮内にも、イタリアNGOによる援助事業により、既存のホールを改装した立派な博物館が開設されており、バミレケの部族語だけではなく、流ちょうなフランス語と英語で解説ができる大変意欲のある学芸員が育っている(写真15,16,17)。フンバンと同様に、バハムも新しい博物館を建設する予定であるが、学芸員の話によると、予算が十分ではないようである。

前述したバンジュンとこのバハムは隣接する首長国同士であることから、これらの首長国の間において情報交換をすることにより、相互に刺激を与え合うことで、文化資源の保全と活用の方策の質を高めることが可能になると考える。

### ⑨ バブング

バブングは木工が盛んなところで、多くの木工職人がいる

(写真18)。バブングの王宮内には所狭しと木彫像が置かれており、それらを見学し、購入することも可能である(写真19)。王宮は、さながら木彫像を中心とする民族芸術品の展示場といった様相である。バブングの首長自身も木工技術を習得し、木彫像を制作することができる(写真20)。バブング首長の話によると、王宮には約3000点の木彫像が並べられており、その中から選ばれた約95点の木彫像を中心とした民族芸術品を、新設した博物館に展示しているということである(写真21)。

グラスフィールドはラフィアヤシ文化圏に含まれるが、博物館の壁や天井、展示台の材料として、グラスフィールドの湿地に生育するラフィアヤシの葉柄が使われており、地域性豊かな博物館のデザインがなされている(写真22)。

今回の調査中に、バブングでニカイ(Nikai)という祭礼が開催された。筆者はバブングの首長から直々に招待状を拝受





写真19. バブngo王宮内の木彫像



写真22. バブngo博物館の入口



写真20. バブngo首長(Fon Ibrahim Ndofoa Zofoa III)



写真21. バブngo博物館の展示品

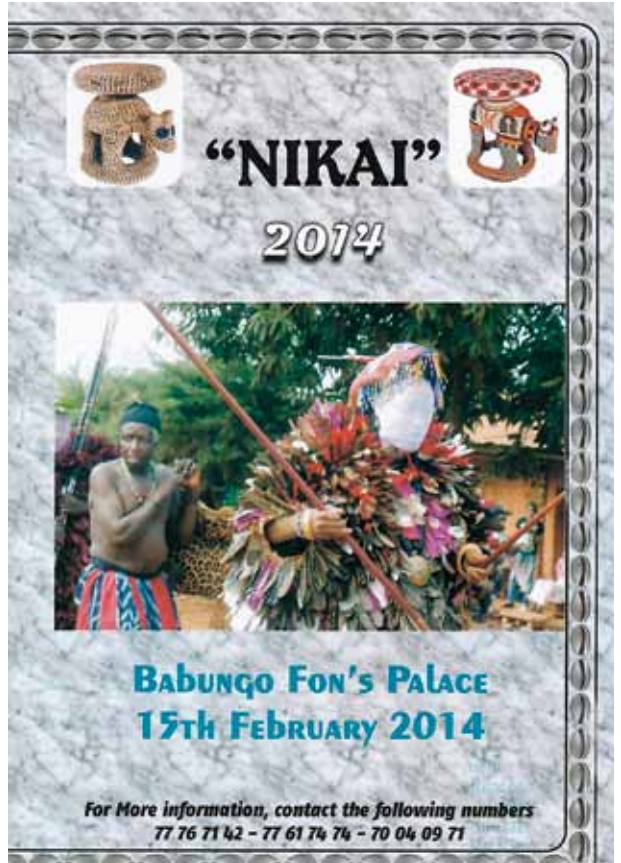


写真23. バブngo首長からの招待状





写真24. ニカイ祭礼の仮面ダンス

し、見学する機会を得た(写真23)。このニカイという祭礼は、王家以外の村人が構成するグンバ(Ngunba)という結社員が、王宮の広場で踊るもので、祭りの意味としては、村に祖霊を迎え入れるものであるといわれている(写真24)。この祭礼には様々な仮面が登場するが、行列の最後では、バブンゴ首長自身もムーブ(Muubu)という特別な仮面をつけて踊るところに特徴がある。グラスフィールドの文化資源としては有形のものだけではなく、儀礼祭祀といった無形の文化資源も豊かであることが理解できる。

## 考察

今回の調査結果から明らかなように、近年、欧米の国やNGOによるカメルーン、グラスフィールドの首長国群における文化資源に関する援助がおこなわれるようになった。しかし、このような海外からの援助がなされているにもかかわらず、バツ王宮をはじめとするカメルーン、グラスフィールドのほとんどの王宮における建築物の補修、維持管理は未だに不十分であり、博物館の設置や運営に関する人手、予算、専門的知識と技能が不足している現状がある。また、首長国に存在する有形、無形の文化資源についての地域住民の関心と理解が

不足しており、観光資源としての位置づけも不十分であることが明らかとなった。

そこで、これまでの学術研究の成果を基にして、JICA(独立行政法人 国際協力機構)の草の根技術協力事業などを導入することにより、カメルーン、グラスフィールドの民族文化に関心のある人びとと共に、地域住民への技術移転を前提として、文化資源の保全と活用を図る必要があると考える<sup>(7)</sup>。その具体的な活動内容として、文化資源のデータベース作成、住民参加型の修復・保全活動や博物館整備、情報発信、学芸員や観光ガイドの育成、土産物開発などがある。また、長期的には、第一次産業中心の自給自足経済を基本として、文化資源を観光資源として位置づけたコミュニティベースド・ツーリズム(地域主導型観光)の導入により、文化資源の保全と地域の活性化を結びつけた地域計画を實踐してゆく必要があると考える。

## 今後の課題

カメルーン、グラスフィールドにおける首長国群の文化資源は、大変貴重であるにもかかわらず、伝統的な首長国群の財政基盤は弱く、地域住民にとって商品作物の販売以外に現金収入の機会は限られている。先述したように、王宮建築の補修、維持管理や、儀礼祭祀で用いられる仮面、木彫像、伝統衣装などの民族芸術品の保存修復に必要な予算や専門知識が不足している。そのため、首長国群の王宮建築や民族芸術品といった文化資源の維持管理が十分に行われず、損逸の危機にさらされている。さらに、地域住民の就業機会が限られ、若者が都市に流出する傾向が強まっている。

一方、第一次産業中心の自給自足経済を主とするこれらの首長国群における地域住民の生活水準を高めるためには、伝統文化を観光資源として位置づけ、新たなコミュニティベースド・ツーリズムを導入する必要がある。新しい観光産業を育成することにより、地域住民の生活を向上させ、失われつつある首長国群の文化資源の保全と活用が可能となる。

例えば、バフツ王宮の建築物が地域住民により修復され、バフツ首長国が有する有形、無形の民族芸術を文化資源として位置づけ、地域住民がそれらの価値に気づき、観光資源として認識し、バフツを訪れる観光客をガイドする知識と技能を習得することにより、コミュニティ・ベースド・ツーリズムを地域住民自身が推進できるようになるであろう。

そのためには、まず、地域住民がバフツ首長国の文化資源の価値を理解することが重要である。次に、それらの文化資源の修復・保全活動を地域住民自身が行う体制が確立すること。さらに、文化資源の価値について情報発信するために必要な知識と技能を習得すること。実際に、地域住民が文化資源の修復、保全活動を通して得た情報を整理し、多様なメディア(DVD、CD、図書、パンフレット、パネル、模型、ポスター、ホームページなど)を用いたコンテンツを作成することにより情報を発信する。さらに観光ガイドの育成を図ることが必要である。

もし、JICAの草の根技術支援のような事業が導入できたとすれば、その具体的な援助活動内容として以下のような内容が考えられる。

- ①地域住民と共に、バフツ首長国の文化資源調査を行う。
- ②地域住民と共に、文化資源のデータベースを作成する。
- ③文化資源の修復、保全、活用の計画を、地域住民と共に立案する。
- ④文化資源の修復、保全、活用作業を地域住民と共にを行い、それらの活動を記録する。
- ⑤文化資源を観光資源と位置づけ、文化資源の情報発信、観光資源のプロモーションに必要なコンテンツを、住民と共に作成する。
- ⑥バフツ王宮とバフツ自治体の文化資源を巡るスタディーツアー<sup>⑧</sup>を実施し、観光ガイドの育成を図る。
- ⑦バフツ王立博物館、バフツ自治体、北西州の州都・バメンダにおいて、バフツ文化資源に関するフォーラムやワークショップを開催する。

カメルーンにおいて、日本のJICAはすでに小学校校舎やFMラジオ放送局の建設などの施設整備に関する援助活動を行っているが、今後、日本のアフリカに対する開発援助とし

て、欧米の国々やNGOが既に行っているような、文化資源の保全と活用に関する援助活動を行ってゆくことが必要である。

文化資源に関する援助活動は、対象地域住民の生活改善・生計向上に直接結びつく。また、地域住民のアイデンティティを高めることにつながり、地域に誇りを持つことができる。地域の工芸職人、サービス産業従事者、若者や女性の意識を変えることにより、地域産業の活性化に結びつけることができる。さらに、観光ガイドの育成、土産物開発、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの導入により、地域における就業機会が増大し、現金収入の増加に繋がる。

文化資源の調査、分析、評価に関する作業をカウンターパートや地域住民と共に行うことにより、人びとの意識を変え、文化資源の価値を知り、高め、情報発信する知識と技能を身につけることができ、事業終了後も地域住民による持続可能な観光開発が可能となる。

大阪芸術大学には、アフリカの民族芸術に関する30年近くの学術研究の歴史がある<sup>⑨</sup>。今後、例えばカメルーン共和国北西州バフツ首長国をカウンターパートとして、地域住民と大阪芸術大学や関係諸機関に所属する研究者や学生が中心となって、民族芸術を中心とする文化資源の保全と活用に関する地域開発を、JICAの草の根技術援助事業などを導入することによって実践することは大いに意義があると考えられる。

## 謝辞

1986年当時、工芸学科教授であった森淳先生には、著者のアフリカにおける学術調査の端緒を与えていただきました。その後、1994年には、塚本学院海外研修員制度により、カメルーンでの現地調査を行うことができました。また、工芸学科、井関和代先生には現在に至るまで、現地調査や論文をまとめる際に、様々なご指導をいただいております。

さらに、今回の現地調査では、カメルーンの各首長国において、首長をはじめとする現地の方々大変お世話になりました。ここに、深謝いたします。



註

- (1) NGO、ワールド・モニュメント財団 (World Monuments Fund) は、アメリカ合衆国のニューヨークに本部を置く非政府組織で、1965年以来、90以上の国々において、歴史的建造物の修復事業を行っており、バフツ王宮の一部の建物の屋根を修復する援助事業が、2010年に行われた。
- (2) 北西州首長連合 (North West Fon' Union, NOWEFU) とは、2009年に設立されたカメルーン共和国北西州に存在する首長国群の首長達が構成する連合組織で、文化的側面の課題を中心とした情報交換を行う。
- (3) Cletus T. Ndifor, "The Inextinguishable Flame of An Ancient Kingdom", Sopre Publications, Bamenda, Cameroon, 2011.
- (4) バメッシング村内の焼き物工房 (Prespot Pottery) は、約25年前にスイスを拠点とするキリスト教のプロテスタントの一派である長老派教会 (Presbyterian Church) の活動をもとにして創設された。バメッシング以外に、バリ (Bali-Nyonga) やバフツにも工芸品を制作する工房があり、プレスクラフト (Prescraft) という名前の組織を運営し、州都・バメンダを中心としてグラスフィールドの工芸品を特産物として販売し、海外へも輸出している。
- (5) 地域住民が主体となり、地域の文化や自然を観光資源として価値づけ、それらの保全と活用を図ることにより、地域社会の発展に結びつける新しい観光のありかた。
- (6) イタリアの NGO である COE (Centro Orientamento Educativo) 協会 は、健康、農業、教育、芸術、文化、社会、スポーツなどの分野における援助活動を行い、カメルーンでは1973年以来、様々な活動を行ってきた。2003年から2006年にかけて、グラスフィールドのマンコン、バブンゴ、バンジュン、バハムの四つの首長国において、博物館の開設、学芸員の育成、図録の出版に関する援助活動を実施した。
- (7) 日本政府の外務省の海外援助事業を担当する JICA (独立行政法人 国際協力機構) の草の根技術協力事業は、日本の NGO、自治体、大学などが培ってきた経験や技術を生かして、発展途上国の地域住民に役立つ協力活動を行うものである。
- (8) スタディーツアーとは、一般的なツアー商品とは違い、学生や一般社会人を対象に、ツアー内容の質的向上と参加者の学び体験を重視して行われる試行的な観光ツアーのこと。
- (9) 大阪芸術大学におけるアフリカの民族芸術に関する学術研究は、森淳名誉教授 (陶芸) が1968年から1971年までウガンダ工科大学の客員教授として現地に滞在したこと始まる。その後、1986年から1990年にかけて文部省科学研究費補助金 (国際学術研究) によって編成された大阪芸術大学の共同研究「西アフリカにおける伝統工芸技術の比較研究」(研究代表者、森淳、研究分担者、井関和代、下休場千秋) による学術調査が実施され、現在に至っている。

参考文献

- Jean-Paul Notue, Bianca Triaca,  
2005 "Mankon, Arts, Heritage and Culture from the Mankon Kingdom, Catalogue of the Mankon Museum", Centro Orientamento Educativo, Italy.  
2006 "Babungo, Treasures of the Sculptor Kings in Cameroon, Babungo: memory, Arts and Techniques, Catalogue of the Babungo Museum", Centro Orientamento Educativo, Italy.
- Cletus T. Ndifor,  
2011 "The Inextinguishable Flame of An Ancient Kingdom", Sopre Publications, Bamenda, Cameroon.
- 井関和代  
2000年、『アフリカの布ーサハラ以南の織機・その技術的考察』、河出書房新社。
- 下休場千秋  
2001年、「自律的観光と民族芸術ーカメルーン共和国の事例を中心にー」、『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究 国立民族学博物館調査報告21』石森秀三・西山徳明編、国立民族学博物館。  
2002年、「中央アフリカ、カメルーン共和国における神聖王国のコスモロジーーティカール族の事例を中心にー」、『藝術文化研究』第6号 大阪芸術大学大学院芸術文化研究科。  
2003年、「カメルーン共和国、ティカール王国文化の変容ーバフツ王宮の博物館計画を事例として」、『民族芸術』VOL.19 民族芸術学会。  
2004年、「バフツ王国のアピンフォ祭りーカメルーン、ティカールの事例ー」、『藝術27』、大阪芸術大学紀要。  
2005年、『民族文化の環境デザインーアフリカティカール王制社会の環境論的研究ー』(株)古今書院。  
2006年、「エコツーリズムにおける文化遺産の価値ーカメルーン共和国、ティカールの事例」、『国立民族学博物館調査報告61 文化遺産マネジメントとツーリズムの持続可能な関係構築に関する研究』、西山徳明編、国立民族学博物館。  
2009年、「カメルーン共和国の首長国群に関する芸術行動学的考察」、『藝術文化研究』第13号、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科。  
2011年、「V章 日本型エコツーリズムの手法の拡がり、3節 エコツーリズムと国際協力、1項 アフリカ・カメルーン共和国 ティカール王制社会」、『エコツーリズムを学ぶ人のために』、真板昭夫・石森秀三・海津ゆりえ編、世界思想社。
- 森淳  
1991年、『西アフリカにおける伝統工芸技術の比較研究』、平成元年度科学研究費補助金 (国際学術研究) 研究成果報告書 (研究代表者 森淳)。  
1992年、『アフリカの陶工たちー伝統工芸を追って二十年』、中公新書。

